

2025年6月の総評に代えて 高橋修宏

大西日振れてパノプティコンの鐘 さいう（石川県）

「パノプティコン」とは、M・フーコーの著作『監獄の誕生』などのキーワードとなる全景望監視システムであろうか。最近では、ポップな歌詞にもなっている。「大西日」、そして「鐘」の措辞が、世界中に張りめぐらされた終末的な光景の手ざわりを暗示する。

空洞のからだを野辺に診てもらう 松下 誠一（東京都）

われわれの「からだ」とは、口から肛門までの「空洞」と言ってもよい存在だ。「空洞」であるがゆえに、外界から病気の原因となる異物が入りこむこともあるし、また「野辺」という外界の主体によって「診てもらう」こともできるのかもしれない。

全くの他人に比べ、
家族には
私を殺す理由が多い。

大嶋 碧月（石川県）

一読、ショッキングな印象が残る。だが、「家族」ゆえの軋轢や確執もあるだろうし、それが引き金となって「私を殺す」こともあるのかもしれない。とりわけ二〇〇〇年代に入ってからの数多くの事件が、「家族」という閉域において起こっていたことを想起するとき、この作はリアルな手触りを伴って迫ってくる。

「右へ倣え」の日々のなか
透明なコップは雨を溜めて裸

常田 瑛子（山口県）

「右へ倣え」が暗示するのは、どこか全体主義と呼んでもよい抑圧的な世界（あるいは、現在）かもしれない。二行目の「透明なコップ」は、そのモノ自体であると同時に、

そんな世界に生きる人間のイメージであろう。結語に置かれた「裸」が鮮烈で、印象的。

青嵐あいつが鳥の司令塔

蝸牛（奈良県）

「あいつ」と名指されたものの正体が明かされぬまま、「司令塔」の結語によって、どこか不穏なイメージが手渡される。「青嵐」の季語も効いている。さらには、A・ヒッチックの名作『鳥』のエコーも。

紙コップ以北のやけに白い手だ

桜庭 紀子（和歌山県）

まず、「紙コップ以北」の措辞に驚かされた。ささやかな日常の情景でありながら、「以北」という言葉を持ち込むことで異和が生まれる。「やけに白い手」も、どこか妙に生々しい。

金魚になれば許してくれる？

おかあさん

檜野 美果子（宮城県）

何より「許してくれる？」の問い合わせによって、発語主体の哀しみが届けられる。「金魚」とは儂く、美しく、鑑賞されるだけの存在の比喩だろうか。そんな存在を強いる「おかあさん」もまた、恐ろしく、そして哀しい。

ぽんにゅいと言えば夏木になる獣

大西 美優（広島県）

「ぽんにゅい」という舌足らずの不思議なオノマトペが面白い。「夏木になる獣」たちも、荒々しい存在というより、幼形のままの獣なのかもしれない。

空の色をうつして水の冷えわたる
海がひとつの眼であることを

早瀬はづき（大阪府）

二行目の把握が見事。「海」に対して、どこか崇高でありながら実在感を伴って捉えられている。「海」が視ているものを暗示しながらも、さまざまな想像する余地を読者にもたらす。

兄ちゃんの貯金箱から
五百円もらい
募金に行ってきました

あゆな（群馬県）

あっけらかんとした語り口には、罪の意識や疚しさなど感じられない。この冗談のような語り口による、私的な所有という窮屈さへの問いかけなのかも。

あたらしい黒子に気づいた日
雨がやんだ日

波津 ゆみ（神奈川県）

一行目と二行目には、一見すると何の脈絡もない。だが、そこに自分なりの理由や意味を見い出すことにより、まったりとした日常に、句切りを入れ、生きてゆくことなのかかもしれない。

深海によばれるように
スロープをゆっくり降りる車椅子

森川 紗（福井県）

一読、M・ハネケの映画『ハッピーエンド』の終盤のシーンを想い起こした。自己に対する絶望か、世界への嫌悪か、あるいは海への回帰か、何もその理由は明かされぬまま、海へ「スロープをゆっくり降りる車椅子」の映像だけが、われわれを置き去りにする。